

[成果情報名]イチゴ「こいのか」の地床栽培における基肥窒素施用量

[要約]イチゴ「こいのか」の地床栽培における基肥窒素施用量は、a 当り 1.0kg で総収量及び年内収量が安定して高く、生理障害果の発生も少ない。

[キーワード]イチゴ、「こいのか」、地床栽培、基肥窒素、収量、生理障害果

[担当]長崎県農林技術開発センター・農産園芸研究部門・野菜研究室

[連絡先]（代表）0957-26-3330、（直通）0957-26-4318

[区分]野菜

[分類]普及

[背景・ねらい]

イチゴ「こいのか」は、2008年に九州沖縄農業研究センターと長崎県、大分県との共同研究で育成し、2011年5月に品種登録された。「こいのか」は、早生性で年内収量を確保できる品種であるが、収量性及び品質の特性を十分に活かす基肥窒素施用量は明らかでない。

そこで、地床栽培において最適な基肥窒素施用量を明らかにする。

[成果の内容・特徴]

1. 各果房の収穫開始日は、基肥窒素を 2.0kg/a 以上施用するとやや遅れる傾向にあるが、大きな差はない（表1）。第2次腋果房までの果房間葉数は、基肥窒素施用量の違いによる差はない（表1）。
2. 総収量は、基肥窒素施用量が 1.0kg/a までは増加するが、2.0kg/a 以上施用しても増加しない。また、年内収量は基肥窒素施用量が多いほど減少する。商品果率は、いずれも同程度である。（表2）。
3. 主な生理障害果のうち、先白果は基肥窒素施用量が増えるほど多くなるが、先青果及び角果の発生はいずれも見られない。着色不良果の発生には基肥窒素施用量による一定の傾向は見られない（表3）。

[成果の活用面・留意点]

1. 「こいのか」の地床栽培では、4月以降果皮の傷みにより市場性が低下するため、3月末までを試験対象期間とした。
2. 試験にはイチゴ連作圃場を供した。
3. 本試験では追肥の施用は行わなかったが、現地においては生育状況や気象、土壌条件等に応じて、液肥等による追肥の施用を考慮する必要がある。
4. 地床栽培では、4月以降は果皮の傷みにより市場性が低下するため、後作品目の導入による輪作体系等を考慮する必要がある。

[具体的データ]

表1 基肥窒素施用量と果房間葉数及び各果房頂果収穫開始日(2010年)

	頂果房	頂果房-第1次腋果房		第1次-第2次腋果房	
	頂果房収穫開始日	果房間葉数(葉)	第1次腋果房収穫開始日	果房間葉数(葉)	第2次腋果房収穫開始日
N-0.5	11月26日	5.6	2月4日	3.3	3月14日
N-1.0	11月26日	5.7	2月4日	3.5	3月14日
N-2.0	11月29日	5.4	2月4日	3.5	3月16日
N-3.0	11月29日	5.6	2月8日	3.5	3月16日

表2 総収量、年内収量及び商品果率

	総収量(kg/a)		年内収量(kg/a)		商品果率(%)	
	2009	2010	2009	2010	2009	2010
N-0.5	334	348	101	129	93.7	95.5
N-1.0	339	362	100	118	93.2	96.5
N-2.0	321	359	97	113	93.9	96.5
N-3.0	324	338	99	109	93.9	95.3

※商品果:不受精果、くず果(7g未満)、着色不良果等を除く市場販売可能な果実

表3 生理障害果の発生率(2010年、総重量比%)

	先青果	先白果	角果	着色不良果
N-0.5	0.0	1.2	0.0	2.0
N-1.0	0.0	1.3	0.0	0.5
N-2.0	0.0	2.4	0.0	0.5
N-3.0	0.0	2.8	0.0	2.1

耕種概要

定植 2009年9月16日、2010年9月17日
栽培様式 地床普通ポット栽培、外成り
栽植株数 700株/a
収穫終了 3月31日

試験区の設定

基肥窒素施用量 0.5kg/a、1.0kg/a、2.0kg/a、3.0kg/a
定植前に「楽らく莓2号」(10-6-2)を施用

[その他]

研究課題名:イチゴ新品種「こいのか(高良6号)」の生産安定技術確立

予算区分:県単

研究期間:2009~2012年度

研究担当者:野田和也、藤田晃久